

【資料】

高木兼寛と教育勅語

松 田 誠

東京慈恵会医科大学名誉教授

永山武美先生(慈恵医大第三代学長)の話によると、高木兼寛先生(慈恵医専校長)は明治30年(1897)ころから教育にいつそう厳しくなり、入学試験にも筆記試験のほかに「品性試験」なる人物試験(口頭試問)を設けることにし、校長みずからこれに当たったという。しかもこの試問には明治23年(1890)に発布された教育勅語に関することが多いというので、当時の受験生はみなこの教育勅語を丸暗記して試問に臨んだという(教育勅語とは戦前の道徳教育の根本方針を示した明治天皇の勅語である)。

この品性試験は高木先生が亡くなる大正中期ころまで続いたらしい。先生は一体この試験になにを期待したのか、そのことを少し考えてみたい。

I. 序

高木兼寛(1849-1920)はがんらい自分の性格について人に語ったことはほとんどなかった。ただ日露戦争のさなか(明治37年12月)、57歳の一人の退役軍人として戦場の満州・旅順を訪ねたとき、内地へ送られる傷病兵の姿があまりにも悲惨だったので、このように語ったことがあった。

「重症な傷病兵が次々と送られてきて、苦しむものが実に多く、マア涙もろい我輩のごときは憐れに思い、おもわず目頭を熱くしてしまっただが、しかしどうにも仕様がありませんでした」と。

これをみると彼は生来涙もろく感性豊かな人物であつたらしいことがよくわかる。幼少から武士の子として厳しい教育を受け、維新時には薩摩の藩兵(藩医)として従軍し、さらに明治に入ってから海軍軍人(軍医)としての生涯を送ったわけであるから、自分の性格についてあまり女々しく語ることはなかったのではなかろうか。

II. 成医会と全人的医療

高木は5年の英国留学を終えて明治13年(1880)に帰国した。彼はこの留学の間に医学の新知識のみでなく、英国の医療を支えている社会的背景までも学んで帰国した。

英国では産業革命いらい貧富の差が大きくひらき、貧しい病人がしだいに増えていった。そして

これを緩和するため、王室はセント・トーマス病院のような大病院には貧しい病人を受け入れる窓口を設けさせ、無料で治療させるようにした。もちろん財源は王室基金であった。また一般人においても、富んだ人が相互扶助の精神から、病院に慈善的に寄付、献金して、貧しい病人を助けるのは当然のことと考えていた。高木はこのような英国医療の倫理面まで学んで帰国したのである。

しかし帰国してみると、日本の医療状況はひどいものであった。医科大学では病人を研究対象とみる研究至上主義が横行し、街の病院や医院ではとかく経営を重視する経済主義に流れる傾向が強かった。医療が病人のためのものであるよりは、医師ないしその組織自体のためのものになっていたのである。

高木は、そのころ華々しく開業し相変わらずの経済主義を押し進めようとしていた大病院の開院式に招かれて、こともあろうにそこでのスピーチで「これでは単なる金儲けの事業に過ぎないではないか」と言って周囲を驚かせたという話が残っている。この話などは当時の高木の気持ちを率直に表したものだだったのであろう。ようするに高木の頭には、現実の医療が病人のためであるより医師側にあることに大きい不満を懐いていたのである。

高木は、新しい医療を目指すための学術団体・成医会を結成し、同時にその実践病院として有志共立東京病院を開設した。病院は有志の募金に

よって賄われ、患者にはもちろん無料でかかれる慈善病院であった。ようするに成医会の目的は、当時の日本の医風を改め、医療の中心を医師の側から患者の側に逆転させることであった。

有志共立東京病院にはもちろん新しい入院病棟もつくられたが、その構造は患者中心のワンルーム形式であった。そこでは患者と医師、看護婦がいつもお互いの位置を確認できるため、精神的にいつも安定することができた。患者のなかには(とくに重症患者には)病気にたいする不安や、死にたいする恐怖のために悩むものもあったが、彼らのために病院の前庭に説教所がつくられ、たえず近くの寺から僧侶が派遣されていた。僧侶は、人生について語り、生きるとは何か、死とは何かを熱心に語って患者を慰め、力づけたといわれる。

こうみてくると高木の目論んだ医療は、病人の身体的な面だけでなく、心理的な面、社会的な面、倫理・宗教的な面まで、あらゆる面から捉えていたことがわかる。

この高木の意図は、現代医療の理想とされる全人的医療によく重なるように思われる。医学辞典によると、全人的医療とは患者の健康問題を biological (生物学的), psychological (心理的), social (社会的), ethical (倫理的) の諸側面から多面的に検討、解決していこうとするものであるという。

III. 医の心と神仏の心

医の心とは病に苦しむ人々をいたわる心であり、仏教でいう慈悲の心のことである。また武士道でいう武士の情けないし惻隱の情に近いものである。先にのべた高木が満州で傷病に苦しむ兵隊を見ておもわず目頭を熱くした心のことであり、医師に必須な心(感性)であることはいうまでもない。

それにしても、この医の心も、心のある一つの状態であるから、身体の内外の状況におうじて容易に変化することは致し方がない。この心の変わりやすいことは日常だれでも経験することであるが、高木もそのことをいつも気にして、「心こそ心迷わず心なり心に心心ゆるすな」とうたって、自他をたしなめていた。そして心がかんたんに変

わらないようにするには、精神修養が必要であり、とくに若い者には道徳教育、宗教教育によって心を信念化することが必要であると主張していた。人生においては道徳、宗教が心の座標軸をなしているというのが彼の信念だったのである。

実は英国留学時代、彼は信仰する宗教のないことを大変不思議がられ、それでは道徳教育ができないではないかと詰問されたことがあった。以来、彼は毎週教会に通うことになったが、そのことによって彼は返って英国の医療がすべてキリスト教的道徳観によってしっかり支えられていることを知った。高木のその後の言葉に「神は善なり、神に代わりて善をなすは、医師の務めなり」というのがあるが、これなどはその頃の影響であろうと思われる。

実は日本でも明治維新までは、高木のような武士階級では、武士としての道徳教育、精神教育が非常にきびしく行われていたのであった、それが維新によって、武士階級の消滅とともに無くなってしまったのである。高木も幼少から、家が神道であったため、母から、どんなところでも神様はちゃんと傍で見えておられるから間違ったことをしてはならぬと教えられ、また父からは侍になるための厳しい精神教育をうけた。嘘を言ったといって、生涯に傷がのこるほどの折檻をうけたほどであった。侍はまめ(誠実)でなければならぬというのである。また7,8歳ころからは儒学塾で熱心に儒教を教えられた。教師は中村敬助という勤皇の志士であった。

英国では上のように信仰がないことを笑われたが、しかし考えてみると、日本にも実際にはそれに代わるべき神道、武士道、儒教の教育がたしかにあったのである。それが立派な道徳教育、宗教教育をなしていたことに気がついたのであった。

このような昔ながらの教育が、明治維新でなくなってしまうことを高木はいつも残念がり、時の為政者(例えば伊藤博文)にその必要をうたえていた。「日本人の思想すなわち武士道、大和魂なるものは、これまで神道、儒教、仏教によって養われてきたのに、維新以後は神道にも儒教にも、また仏教にも依存することができず、また新しくキリスト教に抛らせることもできなかった。ただ修身教育において、それまで神、儒、仏三道

によってつくられた個々の徳目のみをただ羅列するだけになってしまった。しかし徳目なるものは植物の花のようなものであり、神儒仏のような根っこがなくなると、すぐに枯れてしまうのである。根っこになる倫理、宗教の教育がいかに重要であるかを忘れてはならない」というのであった。

高木兼寛の「心身修養」と新渡戸稲造の「武士道」

高木は武士道や大和魂について一書「心身修養」にまとめているが、興味深いことに少し後輩の新渡戸稲造（1862-1933）も「武士道」という名著（1900. 英文）を出版している。さらに面白いことに、新渡戸も米国留学中に、ある法学者から「日本では宗教教育というものがないそうだが、それではどのようにして道德教育を授けるのか」と質問され、即答できなかったことがこの書の執筆理由になったというのである。高木と同じ質問を受け、同じ反応をしているところがまことに面白い。

内容もまた、両書とも神道、儒教、仏教を骨子として、とくに道德的教義は儒教の教えを中心にしている。

IV. 「品性試験」と武士道

成医会講習所が東京慈恵医院医学専門学校に昇格した明治36年ころから、高木は校則を改め、入学試験に品性試験なる一種の人物試験（口頭試験）を加えることにした。その必要とする理由は、「たとえ学術がすぐれていても品性不良なときは、その一身も立たず、一家も治まらず、一国にたいする働きも光を放つことはない。品性ほど先なるものはない」ということであった。

では品性とは一体どういうものか、となると説明は難しいが、これまた武士道からきているようであった。新渡戸稲造の「武士道」にも、「武士の教育にあたって、もっとも重視された第一のことは品性を高めることであった」と力説されている。そして品性を高める条件の第一は、まず卑怯を憎む心であるという。人が見ていようといなかろうと、法的罰則があろうとなかろうと、卑怯な真似はしない、見苦しいことはしないということ

であった。

品性を高める二つめは、精神性を尊ぶことであるという。文学や芸術や宗教を重んじ、金銭欲、物欲にからむ俗事を低くみることである。森鷗外の「興津弥五右衛門の遺書」にも、計算だかい家来をとがめる細川忠興の言葉がある。「すべて功利の念をもって見候わば、世の中に尊きものは無くなるべし」（なんでも損得勘定で見えたら、世の中に尊いものなど無くなってしまふ）と。たしかにその通りである。

品性を高めるもう一つは、何か崇高なものにひざまずく心（つまり宗教心）をもつことだという。高木もこのように述べている。「若いときから人間以外のある偉大なる勢力をみとめ、つねにその力に頼るような習慣を身につけることです。そうすれば精神上に不動の観念があらわれてくるものです」と。日本の場合は神や仏や、あるいは自然そのものが偉大な勢力になるであろう。

実際の品性試験では、高木は（次項でのべる）教育勅語がしめす宗教をテーマにして質問し、受験生のもつ医療に関する倫理観、宗教観を探ろうとしたのであろう。彼がこの品性試験に期待した目論見は、それに合格した新入生に与える次のような訓示によって推測することができる。

すなわち「私は品性試験において、諸君の精神が如何なる“城”に立て籠もっているか、その“城”が破られんとするとき、諸君はわが生命を捧げてもこの“城”を守らんとする精神があるかどうか、“根拠地”を守ろうとする精神があるかどうか、を一々お尋ねしたわけであります」と言うのである。訓辞のなかの“城”とか“根拠地”に強い倫理観を意味させていることはいうまでもない。これをみれば、高木がこの品性試験によって、優しいなかにも毅然とした信念、理想をもった学生を入学させたかったことがよくわかるのである。

失敗したら切腹する 周知のように高木は、脚気病の原因は栄養の欠陥にあると考えていた。そしてそれを証明するために、多くの反対を押し切って、筑波艦333名の乗組員をつかって臨床試験をおこなったのである。そして幸運にもそれに成功することができたのであった。

後年、若い軍医から「もしあの時、失敗した

らどうなさる心算だったのですか」と問われたとき、高木は言下に「その時はただちに切腹してお詫びする心算であった」と答えている。つまり“侍は言い訳しない”のである、そして切腹によって誠実を示すのであった。

中野孝次（作家）も品性についてやはり同じことを言っている。「もともと日本人は、人間においてももっとも大切なものは品性つまり高尚な心であると考えていた。このことを外国で講演してもっともよく理解してもらえるのは英国のインテリたちであった。英国の知識人は、その国に質実な紳士の気風と伝統があるせいか、このことをよく理解してくれた」と。そして中野がここで述べている品性（高尚な心）というのも、日本人がもっている倫理性の高い武士道精神のことであったのである。

V. 教育勅語と「忠孝論」

上のように高木は、明治維新によってそれまで続いてきた道德教育、宗教教育が消えてしまったことを大変残念に思っていたが、明治23年(1890)になってようやく明治天皇の教育勅語なるものが発布されたのである。彼は大きな期待をもって迎えたに違いない。

この教育勅語は、忠孝を核とする儒教的徳目を基礎に、忠君愛国を究極の国民道德とするものであった。それは全国の学校へ配布され、礼拝・奉読の強制によってやがて天皇制の精神的・道德的支柱になっていった。

この勅語に示された天皇、国家、神々への崇敬を結びつけるいわゆる国家神道への傾向はしだいに社会前面にあらわれ、やがて1930年代以降のファシズムへ走ることになるのであるが、何人かの宗教家（とくにキリスト教徒）はこの傾向に不安を感じ、この国教化に強く反対した（そのなかで第一高等学校教授・内村鑑三の「教育勅語不敬事件(1891)」は有名である。内村は新渡戸稲造(前出)と同じく札幌農学校(北海道大学の前身)在学中にすでに洗礼を受けていた)。

内村鑑三の教育勅語不敬事件 これは国家神道の国教化と信仰の自由の主張との間に生まれた事件であった。内村鑑三は当時第一高等学校(現東大教養学部)の教授であったが、同校に授与されたばかりの天皇署名入りの教育勅語の奉読式において、教授と学生が次々と同勅語の前で深深と礼拝をしていくなかで、彼はその偶像崇拜的行為に抵抗があって、軽く頭を下げる程度で退いたのである。これを他の教授と学生が見とがめ、激しい非難を浴びせたのである。さらにマスコミからも非難をうけたために、結局解職となったのであった。

現在からみると、教授、学生がこぞって内村を非難しているところはまことに時代順応的である。

ところが高木の場合、自分の家がもともと神道であり、また幼少から父(薩摩武士)や塾の教師(勤皇の志士)から厳しい武士道教育、儒教教育をうけ、さらに発布時は帝国海軍の現役軍人であったから、この勅語の発布はむしろ好ましく映ったのではないかと思われる。

それにもともと高木には、宗教にはいろいろあるがその本質はみな同じことだといった達観があった。「神道を信じて、仏教を信じて、キリスト教を信じて、結局のところ、それらを深く究めればみな同じ真理に達する」というのである。そのこともまたこの勅語を受け入れ易くしたのではないかと思われる。

教育勅語には儒教由来の一般的な徳目が並べられているが、その前段の総論の部分に、我が国の教育の根本が「忠孝」の精神にあったことが述べられている。高木はこの忠孝という言葉の意味、解釈についてきわめて大きい関心を示した。それは異常なほどであった(忠孝に関する彼の文章や「忠孝」と書かれた扁額や紙本の類も大学の史料室に数多くのこされている)。

当時、忠孝といえば君(天皇)に忠義、親(父母)に孝行という解釈が常識であったが、高木はこの常識とはまったく違った解釈をするのである。彼独自の解釈を簡単に述べるとこのようになるであろう。まず忠という文字であるが、これは、その構成字画から考えて、「我」が宇宙からの声(神



高木兼寛（雅号・穆園）の書「忠孝」
（東京慈恵会医科大学史料宝蔵）

の声）を聴いて、それを言葉にしたものであり、さらにつぎの孝という文字は、その言葉にまめに（誠実に）従うということであるという。つまり忠孝は和訓では、宇宙の声に誠実にしがうとまとめて読むべきであるというのである。彼によれば、忠孝の道はもともと日本古来の“神ながらの道”を儒教、仏教で補翼したものであり、宇宙の声をそのまま言葉にしたものであるという。そして、仏教を信じて、儒教、キリスト教を信じて、結局のところ、忠孝の道に到達するというのであった（「心身修養」より）。

一方、明治30年（1897）頃から高木は、当時の学生の精神が次第に日退月却（日進月歩の反対）の状況にあることを深く嘆き、それを救うにはこの忠孝の道を徹底的に教え込むしか方法がないと考えたのであった。そしてその一端が受験生にたいする品性試験なるものにあらわれたのである。

ただそのような高木の深い意向が受験生にどこまで理解されたかはわからない。多くの受験生にはその高邁な意向が理解できず、教育勅語を丸暗記して試験に臨むという結果になったのではないだろうか。“親の心、子知らず”である。

VI. 大和魂と武士の情け（惻隠の情）

高木のいう忠孝の道と、ここにのべる大和魂とのあいだにはあまり大きな違いはないようである。彼はこのように言う。「大和魂をどうしてつくるかといえば、それは忠孝の道であります。儒教、仏教で忠孝の道を補翼すれば大和魂はよく育ちます」、「大和魂は神ながらの道すなわち忠孝の道で補翼すれば健全に発達します。忠孝の道は大和魂の唯一の滋養物であります」と。要するに、

高木には忠孝の道も大和魂も、けっきょく宇宙の道理そのものであり、人間の生きるべき大道であったのである。

高木の大和魂の具体例については、つぎのような有名な話がこのこっている。

日露戦争が始まったころ、ロシアのウラジオストック艦隊が日本海に出没して日本の輸送船団に脅威をあたえていたが、この脅威を封ざる任務を負っていたのが上村彦之丞大将ひきいる上村艦隊（4隻）であった。

明治37年（1904）8月14日、上村艦隊は蔚山（ウルサン）を南下するウラジオストック艦隊（リューリック巡洋艦以下3隻）を発見し、ただちにこれに砲火をあびせて、まずリューリック艦を撃沈させた。しかし他の2隻は撃破されながらもウラジオストックに逃げてしまった。2隻が逃げられたのは、上村大将が追撃するのを止めさせて、それより沈没現場にもどって、海面に漂うロシア兵を救いあげ救助したためであった。その時、救ったロシア兵は実に627人もあり、日本の各艦は助けられたロシア兵で一杯であったという。

上村大将にしてみれば、敵兵であってももう武器をもたないただの弱者である、彼らが海のなかで苦しみながら溺死していくのを見て見ぬ振りをして、その場を立ち去ることはできなかったであろう。彼らはもう戦意を失い、死の恐怖に怯えながら、ただ死をまつばかりの漂流者なのである、武士の情け（惻隠の情）を抱かざるをえなかったのである。

しかしこのことを知ったわが国民は「敵の漂流兵など救う必要など全く無い、逃げる2隻をこそ追跡し、沈めるべきであり、逃がすべきではなかった」といって上村大将を激しく非難したのであった。

ところがこの非難ごうごうのなかにあつて、高木は敢然と上村大将の人命救助の行為を支持、賞賛したのであった。「上村大将が救いを求めて漂う敵国水兵をみて、可哀相であるから全員救い上げろと命令されたのは、世界に無類の立派な行為であります。これを知った外国人は、日本人は奇態だ！俺の国だったら放っておくだろうと言いつつ合つたと聞いております。しかし、そもそも日本の大和魂には、このような優しいところがあるの

であります！」と。その時、高木には、異国の海で死ぬロシア兵の心細さ苦しさを、そのことを故郷で聞く家族の嘆き悲しみが、自分のことのように思われたのではないだろうか。

おそらくその頃の高木は、宇宙の神のまえにひざまずき、神の声に聴きいていたのであろう。そしておそらく神の声は「上村大将の行為を絶賛すべし」だったのではないだろうか。その声は、付和雷同する大衆の俗論よりもはるかに深い真理であったのである。

新渡戸の「武士道」では、武士道の要諦は智（智慧）、仁（慈悲）、勇（勇氣）であったのにたいして、高木の「心身修養」における大和魂の要諦は、まめに（誠実に）、やさしく（優しく）、あっさり

（淡泊）、すなお（素直）であった。

なお新渡戸は昭和初期まで生きたが、つねに反戦平和主義者であったという。

また司馬遼太郎によると、かつて大和魂さえあれば貧弱な兵器であっても戦争には勝てるという世にも不思議な教育が行われたことがあったが、少なくとも日露戦争まではそのような教育はなかったという。

参 考 図 書

- 1) 高木兼寛. 心身修養. 東京; 広文堂書店: 1916.
- 2) 新渡戸稲造著. 矢内原忠雄訳. 武士道. 東京; 岩波書店: 1938.